

1983年の中海にて

三宅博
三宅豊恵

昨シーズン(81年~82年)と違って、一応、中海白鳥海岸に、白鳥の姿が見られるようになった。お正月を迎えるまでに、散ってしまって、白鳥海岸には、白鳥がいなくなるのではないかという不安は、今までのところ、拭いさられていた。

「白鳥が、戻ってきて、よかったですね。」

「そうです。今年は、初めて餌付けした時の気持ちに戻ってするつもりだったです。こいつは、どうでも、頑張らにゃいけんと思ったです。」

との、門脇益市氏の声は、力強かった。

しかし、やはり、不安は、現実へと移行していった。1月6日は、今シーズンにはいって、こんなこと初めてだという、私達にとっては、最悪の状態になっていった。

昨日より、1日中、雨が、しとしと降り続き、今日こそはと思って、目覚めた時、雨音がしないのを、心嬉しと思って起きてきたのに、またもや、7時半頃より、しとしとは、始まった。朝食が終る8時半頃には、カモさえも、姿を少なくしていった。中海の色は、冬の色をなして、風が、やや波をおこし、その波は、主のいない白鳥海岸へうちよせた。

白鳥は、まだ、1羽も姿を見せない。門脇氏曰く、1羽も飛んでこないということは、今年、こんなこと初めてだ、という。役場に出かけられていた門脇氏は、10時半頃戻られて、

「だんだん悪くなってきましたね。もう今日は飛んでこんでしょう。」と、眩やかれた。役場に出向かれる前は、

「希望なきにしも非ずですよ。もし、大挙して飛んできたら、役場に電話して下さい。」とまで、私たちにことづけられたのに、今となっては、外に出て、ながめている気力さえも失せていた。10時45分、諦めていた私たちの小屋の頭上を、3羽が、希望を掠めて、旋回しただけで、沢町の田の方へ、又、飛んでいった。

「明日、天気が良けりゃ来るわね。」

トビが、2羽舞っていた。

昨日(1月5日)は、雨が降っていても、朝、67羽飛んできた。しかし、例のカモが、餌を分捕って、白鳥は、餌の傍へよれない。つまり、餌付かず、8時半頃、全て、飛び立った。

これは、私の勝手な思いであるが、カモは、ここでは、憎らしい存在であった。カモを愛する人には申し分けないが、私も、鳥類全てを、いとおしく思う1人であるが、ここでは違っていた。特に、オナガガモが、群をなして、遙か彼方まで点在し、双眼鏡で眺めまわしたなら、「わあ。」の声をなして、誰も、立ち去らないであろう数が、恐らくは、数万のカモが、中海にあり、餌でも播こうものなら、白鳥の餌に非ずして、カモ専用餌場の如くで、門脇氏に於いては、

「まるで、カモのじゅうたんを敷いたようだ。」と、いわしめた。

伯太川東岸に沿って行って見た。我が白鳥殿は、田んぼにおわした。50羽ずつ程、6ヶ所に分かれていた。

白いはずの顔も、半分程も、泥んこにして少ない落ち穂を啄んでいた。そして、それは、夕方、家々に電気が点るほどに、陽が落ちるまで、続けられ、いちどきに、彦名の方へ、飛んでいってしまう。

なぜだろう。その思いが、今シーズンも、私たちの胸をいっぱいにした。どうして白鳥は、白鳥海岸に来ないのだろう。どうすればいいのだろう。中海の白鳥に関する危機は、想像以上に悪いことを、広く、皆様に知らせたい。そして……。